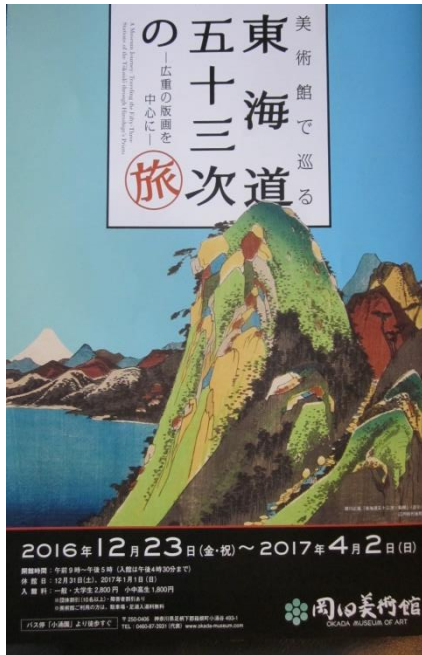


美術館で巡る東海道五十三次の旅

— 広重の版画を中心に —

岡田美術館（箱根・小涌谷） 2016.12.23～2017.04.02



「歌川広重」(1797～1858)は、江戸時代後期の浮世絵師で、大成功の「東海道五十三次」は53の宿場に日本橋(江戸)と三条大橋(京都)を加えた55図から成る「浮世絵版画」である。

この名作品は、東海道を旅する人々や、美しい風景を季節や天候、時間の移ろいと共に描いた傑作として知られ、特に「風景画」に見られる情趣に富む細やかな作風は人気を博した。

本展は、風景画の名手として「広重」の名を高め、出版された「保永堂版」を一挙に公開するとともに、東海道の宿場に関する名所の美術をあわせて展示する企画で、第10番目の宿場で最大の難所と知られた「箱根」の地で“特別展”として展示されるものである。

《東海道五十三次 箱根(湖水図)》(ポスターの写真は部分)

東海道五十三次の宿場「箱根宿」は、宿場では最高の標高725mの箱根山にかかる「箱根峠」と「箱根関所」の間の狭い地域の高地に設置されたもので、当時の幕府も宿場の維持・管理などに大変苦勞をしたとされている。

《東海道五十三次 日本橋(朝之景)》



東海道五十三次のシリーズ起点である「江戸」から京都へ向かう「日本橋」で、巻頭を飾るにふさわしく参勤交代の大名行列が朝早く江戸を出発する風景が描かれている。

一方で、魚を天秤棒で担いだ行商が、向岸の魚河岸から仕入を終え、江戸で一番賑わいである日本橋の早朝の活気が伝わっている。

他の展示作品としては、歌川広重の版画《小田原(酒匂川)》、《京都(三条大橋)》、《岡部 宇津之山》、肉筆画《箱根温泉場ノ図・箱根湖上ノ不二》、更に、葛飾北斎の《富嶽三十六景 神奈川冲浪裏》、横山大観の長さ約9mの大作である《霊峰一文字》や、四季折々の《金屏風》などが見物である。